

書 評

丸山浩明編著：『パンタナール—南米大湿原の豊饒と脆弱—』海青社，2011年9月刊，295p.，3,800円（税別）

本書は、著者らによって2001～2010年の10年間にわたって実施された、ブラジル・パンタナール湿原における自然環境と住民の生活・文化に関する詳細なフィールドワークの成果をまとめたものである。パンタナールは、ラムサール条約登録湿地であり、ユネスコ世界自然遺産であるものの、これまで日本の研究者による本格的な学術調査はあまり行われてこなかったようで、本書の「はじめに」でも「わが国では最初のパンタナールに関する学術研究書といえる」としている。著者らがこのいわば研究未踏の地を対象に定めた動機とは、本書の「はじめに」で編者が「われわれは、先住民のインディオや古来の植民者たちが、地域固有の環境に順応しつつ獲得してきた環境資源利用の知や技術を、今日の生活・文化にも積極的に役立てつつ、未来へと継承していくことの重要性を科学的に立証する必要がある」、そして「これまで等閑視されてきたパンタナールの伝統的な環境管理システムや、資源利用のワイズユースを科学的に再評価して、それに立脚した住民主導の内発的發展を早急に進める必要がある」と述べているように、もはや世界の普遍事象ともいっていい、外部の開発資本や論理の導入に伴う地域固有の自然や文化の喪失を食い止めるための答えを、その典型的な事例地域である当地での実証研究を通じて追究しなかったということではなからうか。研究者としての著者らのこのモチベーションは、本書を通じて貫かれており（とくに第5章のⅡの8および第6章以降の論考）、最後の「おわりに」

へとつながっていく。本書はその内容や構成からいわゆる地誌書の類に属する書籍といえるが、単なる個性記述に終始し問題意識のない従来の地誌書とは一線を画す、本書の最大の特色がこの点にある。

本書は大きく3部構成になっており、「はじめに」と「おわりに」を除けば全9章からなる。以下にその内容を簡潔に紹介する。

第Ⅰ部「パンタナールの自然環境」は、自然地理的な事項を記述したセクションであり、第1～3章からなる。「第1章 地形・気候と水文環境」では、パンタナールと周辺地域の地形特性とその形成史、および雨季と乾季で明確に降水量が異なる南パンタナールの扇状地地形における水文環境について概述している。「第2章 生物多様性を支える多様なビオトープ」では、南パンタナールのニュエコランディア地区を対象に、地域住民の主體的な環境認識が反映されたものとしての地名を調査するという、民俗分類の方法を援用し、土地の浸水状況や地形、植生によって主に分類された16種のビオトープを検出し、河床との比高に応じた分布モデルを提示している。「第3章 地表水と地下水の交流関係—多様なビオトープの水質と水の起源—」もニュエコランディア地区を対象とし、地表水と地下水を含めた水環境にみられる季節的・地域的多様性とそのメカニズムについて、水文学的な観測と数値モデルに基づき実証している。

第Ⅱ部「南パンタナールの牧畜業と観光開発」は、人文地理的な観点から主要な話題を取り上げて記述したセクションであり、第4～7章からなる。「第4章 パンタナールの先住民と植民・開発の歴史」では、インディオ集団の居住地であっ

たパンタナールへの白人入植の歴史、とりわけ17～18世紀前半にかけてのバンデイラと呼ばれた奥地探検隊の活動、18世紀の金脈の発見による金鉱業の盛衰、19世紀のゴメス・ダ・シルバー族とバーロス一族による大規模農場開発について紹介している。「第5章 牧畜業の盛衰と牧畜文化」では、20世紀に入り大きく発展したパンタナールの牧畜業を取り上げ、その農場従事者たちの伝統的な生業形態や生活様式などについて、写真を多く用いながら詳しく解説している。「第6章 エコツーリズムの導入と発展」では、現在アマゾンと並ぶブラジルの代表的なエコツーリズム地域であるパンタナールを、核心地域、核心周辺地域、外縁地域に3区分し、それぞれの地域における観光業の経営事例を紹介している。そして、3地域のエコツーリズムの特色を比較検討し、その課題について指摘している。「第7章 スポーツフィッシングの進展と漁村の変貌－エコツーリズムに翻弄されて疲弊した漁村－」では、前章で述べたパンタナールのエコツーリズムの主要形態であるスポーツフィッシングに焦点を当て、その発展に伴う水産資源保護の法規制と、伝統的な魚釣り漁師が、釣り客向け生き餌捕獲漁師やガイドへ転身することによる、漁村社会の変貌について詳述している。

第Ⅲ部「南パンタナールの農場経営と環境問題」は、自然・人文の複合的視点から事例農場・地域の実情に迫った応用的論考2編からなる。「第8章 伝統的な農場経営とその課題－パイアボニータ農場の事例－」では、ニュエコランディア地区の伝統的農場を事例に、第2, 3, 5, 6章の内容も総合しながら、粗放的牧畜経営にみられる放牧地の環境特性と環境容量、放牧牛の採食行動、牛の飼育管理と草地の維持管理の実態などを詳述し、その課題と対策について考察している。「第9章 アロンバードをめぐるポリティカル・エコロジー－伝

統的な生態学的知識と科学的な生態学的知識の相剋－」では、タクアリ川を挟んでニュエコランディアの対岸に位置するパイアグアス地区を対象に、アロンバードと呼ばれる、雨季の増水に伴い自然堤防が破堤して形成される河川の流出口の管理問題を取り上げている。すなわち、伝統的な牧畜業において人為的になされてきた雨季の開放と乾季の閉鎖に対して、環境保護の大義名分の下、人為を排除した周年開放を強いる法規制が適用されたことによる、自然生態系や農場経営、住民生活が被った影響について考察している。

以上が本書の内容であるが、本書について評するとき、何よりもまず、10年にわたってきわめて豊富で詳細なフィールドワークを積み重ねた著者らに最大の敬意を表さずにはいられない。評者は、著者らから調査中に出くわしたいろいろなハプニングを聞くことがあったが、アフリカバチの群れに襲われて命からがら逃げたとか、夜のジャングルで迷子になったとか、普通に日本で生活していればまず経験するはずのない危険が常に潜む場所へ、著者らは地球の裏側から自ら進んで毎年出かけていくのである。冒頭で述べたモチベーションからくる研究者としての強い使命感が、著者らを毎年彼の地へと駆り立てるのであろう。

その著者らの10年間の答えが、最後の「おわりに」で整理され、持続可能な発展への取り組みとして具体的に5つの提案となって結実している。長年にわたる綿密な調査に裏打ちされたそれら5つの提言は、いずれも非常に説得力のあるものであり、すぐにでも現地でその実現に向けた具体策が実践されることが望まれよう。

現地に一度も行ったことのない評者が、本書の内容について具体的に批評する資格は持たないかもしれないが、1点だけ気になる点があるとしたら、上記の提案に関わる部分である。すなわち、本書では「おわりに」での5つの提案以外にも、第

8章や第9章などでも、伝統的な生業・生活文化の維持と環境保全を両立するための具体的提言がなされているが、著者らのこの提言が、はたして現地の当事者たちの耳にきちんと届いているのかどうかという点である。もしそのような現地への研究成果の発信・還元（フィードバック）が、日本語で書かれ日本で出版された本書に止まっているとしたら（初出論文のいくつかは英語であるが）、それは非常にもったいないことである。今度、著者らと会ったときには是非その辺のところを聞いてみたい。

いずれにしろ、本書の有する地誌書としての資料的な価値や、学術的論考集としての質の高さは、フィールドワークを経験したことのある読者

ならば誰もが認めるところであろう。本書と同様のモチベーションを持った研究者によって、本書と同等の詳細なフィールドワークが積み重ねられた学術研究書が、今後も世界中のさまざまな地域を対象として出版されることが望まれる。

最後に私事で恐縮であるが、評者も2011年から、この丸山浩明隊長率いるブラジル調査隊の末席に加わることになった。今度の対象地域は、パンタールと並んで豊かな自然環境を有するアマゾンである。したがって、評者にとって本書を通読したというのは、まさにこれから目標とすべき大山を仰いだようなものであり、身が引き締まる思いである。

（山下亜紀郎）